

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 計画

達成度（評価）	
A	：十分達成できている
B	：おおむね達成できている
C	：やや不十分である
D	：不十分である

学校名	佐賀市立新栄小学校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 指導三部による主体的な教育活動の展開、タブレット端末を活用した研究・実践等により、若手教員の指導力向上や中堅教員の参画意識の育成に繋がり、協働体制の強化され学校全体の教育力が向上した。 年間の時間外勤務の職員平均は約360時間で、大半の職員が時間外勤務の解消に向けて取り組んだと回答している。個人差があるので、全職員で働き方改革の目的を共通理解し、更なる業務改善を進めていく必要がある。 コロナが収束しつつある中で、地域人材や外部講師等の力を借りて、キャリア教育を充実させ、児童に自らの夢や目標に向けて努力する意識を高めたい。
2 学校教育目標	ともに たくましく 生きる 子どもの育成
3 本年度の重点目標	<p>①指導5部【こころ部・まなび部・そだち部・なかま部・ちいき部】の主体的な教育活動の展開</p> <p>②自らよさに向かう児童の育成と「今日が楽しく、明日が待ち遠しいクラス」づくりの実現</p> <p>③主体的に学習に取り組む子どもを育てる指導法の模索とICT機器を活用した授業づくりの実現</p>

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師90%以上	・マイプランを一覧にして掲示、共有し、校内研究や会議などの場で取組状況の確認、促進を図る。	A	・校内研究で一斉実施を通して授業づくりを学年、各部で行うことで授業力向上につなげることができた。また、相互に授業を参観することで、他の教師の授業を観る機会が増えたことも授業力向上に繋がったと考える。放課後学習会は、継続して行ったことで学力の底上げに繋がっており、保護者も喜ばれている。	A	・先生方の授業に対する取り組みがとても前向きであると感じた。今後も期待できる。 ・校内研究で指導案を練り上げ、授業を実施し、研究会を開くことで教員の授業力が高まったと考える。授業を参観すると指導技術のよさに触れることができた。	まなび部
	○授業において児童が見通しをもって活動ができ、筋道を立てて自分の考えを書く機会や何をどうやって説明するかという意見交流する場を増やす。	○児童アンケートにより、「見通しをもって活動できる」「意見交流することが有効だ」と気付く児童の割合を80%以上	・「授業づくりステップ1・2・3 Vol.2」を踏まえ、全教科の授業で「話し合う活動」を設定する。 ・算数科において「新築スタイル」の授業の型を基本として「ICT利活用」を進める。 ・「ほかほかカード」に全校で取り組むことで、自己肯定感の向上につなげ、友達のように目を向ける児童を育てる。 ・「いじめ・命を考える日」には、年間計画に基づいて全職員で計画的に講話を行う。	A	・「新築スタイル」の授業の型を基本として授業を行うことで、「話し合う活動」を設定し授業実践ができた。また、校内研究と絡めてICT利活用も促し、職員への研修も入れてきたことで、活用頻度や活用方に高まりが見られた。児童アンケートの成果指標では、中間評価同等の93%であった。	A	・生き生きと自分の考えをまとめて発表していた。「話し合う活動」成果だと思つた。 ・97%の児童が「教え方がよく分かる」と回答していることから、積極的なICT活用等で、児童が見通しをもって学習していることが要因だと考える。	まなび部
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「自分や友達のように気付くことができた」と回答した児童の割合を85%以上	・「ほかほかカード」に全校で取り組むことで、友達のように気付くことができたと回答した児童は約90%だった。ほかほかカードを通して、お互いのよさを見つたり、それを他の児童が見て気付いたりできた。	A	・「ほかほかカード」に全校で取り組むことで、友達のように気付くことができたと回答した児童は約90%だった。ほかほかカードを通して、お互いのよさを見つたり、それを他の児童が見て気付いたりできた。	A	・自分や友達のように気づき、互いを認め合う手立てとして、「ほかほかカード」が有効に働いている。児童の目に触れる所に掲示することで、思いやりや優しい気持ちを引き出している。	こころ部
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的対応ができていますと回答した教員85%以上	・子ども支援委員会や「ここにアンケート」を月に一度開催し、気になる児童や事案について、早期発見や早期対応の充実を図る。	A	・いじめ防止等について組織的対応ができていたと回答した教員は95%以上だった。子ども支援委員会や「ここにアンケート」の計画的な実施、相談しやすい職場環境が早期発見等につながっている。	A	・いじめ防止として、毎月「ここにアンケート」を実施し、子ども支援委員会で全職員で共通理解する場を設けてあるところが素晴らしい。 ・いじめは些細なことがきっかけで発生すると思うので、大人の目で見逃さないようにしましょう。	こころ部
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよさを認めてくれている」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒75%以上	・4年生の「二分の一成人式」5年生の「誕生学」6年生の「12歳のハローワーク」を実践する中で、キャリアパスポートやICT機器等を活用し、児童のよさを数多く見つけ、積極的に伝える。 ・多彩なゲストティーチャーを招聘し、児童が話を聴いたり質問したりすることで、働くことの意義を感じさせ、将来の夢や目標をもつ契機とする。	A	・キャリアパスポートを活用し、児童は毎学期初めに目標を設定し、学期末に振り返ることで、自らの成長を実感することができた。 ・4年生は二分の一成人式で成長を実感し、5年生は助産師の講話で命の大切さを学び、6年生は職業人の講話で仕事のやりがいや学んだ。児童は自らの生い立ちや将来について考えることができた。	A	・4年生から6年生に向けてキャリア形成を図るため、目標設定や振り返りを計画的に行い、自らの頑張りと成長を見出す手順が踏まえてあり、児童が夢や目標をもちやすいと思つた。 ・「人生これから」の子どもたちに視野を広げてもらいたい。そのためいろいろな生き方があることを知ってほしいものです。	ちいき部 4, 5, 6年担任
	○(学校独自重点取組・任意) ◎互いの良さを認め合い、生かそうとする教育活動の開発	○低学年児童の90%が高学年の言動を模範とし、学校生活に生かそうとしている。 ◎5, 6年生の90%が学校のリーダーとしての自覚をもち、生活することができる。	・月2回程度のたわわりタイムを実施し、異学年交流の在り方を探る。	A	・1年生の90.3%が高学年の言動を模範とし、学校生活に生かそうとしており、5・6年生児童の90%が級生の模範となる言動を心掛けている。後期はたわわり時間を導入したことにより、異学年間での活動機会が増え、上級生はリーダーシップが、下級生はフォローシップがより育ったと考えられる。	A	・児童数が減少する中、異学年交流のよさを教育活動に取り入れ、心の教育を進める取り組みがよい。 ・縦割り活動に大いに期待している。学級は離れたところで自分の居場所ができることも大事だと考える。	なかま部
	次の中から1つ以上を選択 ①「運動習慣の改善や定着化」 ②「安全に関する資質・能力の育成」	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒50%以上 ●児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする	①体育の授業を通して、児童と運動の関係を豊かにしていく。 ・学習カードの活用 ・教材・教具の工夫 ・運動遊びの工夫 ④交通安全教室だけでなく、実態や時期に応じた指導を、随時行っている。	A	・後期に実施した運動アンケートでは、65%の児童が1週間で420分以上、授業以外で運動やスポーツをしていると回答しており、前期よりも15%向上している。ただ、帰宅後や休日の運動時間に関しては、前期同様二極化が見られた。 ①前期では学級により差があったので、部から「体育学習のハンドブック」という形で、教材や教具の工夫や運動遊びなどについて全職員に配布し、活用してもらった。 ④前期同様、実態に応じた指導を、学年集会等で行った。また、校内放送による全体指導も行った。注意喚起に努めた。適切な指導を継続して行うことが、児童の意識向上にもつながっている。	A	・子どもたちの運動量を増やすために、「体育学習 ハンドブック」や「学年共通の学習カード」の活用を図ったり、児童集会でスポーツチャレンジを計画したりと運動能力の向上を図った取り組みがとてもよい。 ・今、身体を動かして遊ぶ方法を子どもたちは知っているだろうか。ゲーム以外に楽しいことを知っているだろうかと思つています。学校の働きかけに大いに期待しています。	そだち部
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在職等時間の上限を遵守する。	・業務の質を維持しつつ効率化すること意識し、「いつもより15分早く退勤する」ことを目標に時間外勤務削減を目指す。	A	・4月から1月までの10か月の月平均時間外勤務は、28.3時間であった。このペースを維持できれば年間では約340時間となる。めあてを達成できるように時間外勤務削減に取り組むたい。	A	・業務の質を落とさないように時間を効率的に使うように目標数値をあげて全員で取り組んでいく一体感が素晴らしい。 ・留守番電話、配信メール等で業務改革に取り組んでいるのが分かった。	教頭 全職員
	○(学校独自重点取組・任意) ○校務の効率化の推進	○(学校独自成果指標・任意) ○各部一つ以上の改善策を提言する。	・全職員で働き方改革についての話し合いを学期ごとに行い、改善策を練り実践する。	A	・12月に学校評価アンケートなどで職員の意見を集約した。振り返りのアンケートはフォームでのQRコードでの集計、読書を充実させる方策、たわわり活動の活性化策などを先立のアイデアを今後の学校運営や教育に生かしていきたい。更に、今後も先生方の意見を聞いていくことは継続する。	A	・校務の効率化を図るため、全職員からアイデアを募集し、その中からいいものは取り入れ、学校運営や教育活動に生かす姿勢が素晴らしい。 ・先生方の得意分野を生かし、自分が担任していない学級の授業にも取り組んでほしい。	教頭 全職員

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○	○教職員の資質向上	○(学校独自成果指標・任意) ○学年担任システムによる指導の推進	○(学校独自成果指標・任意) ○学年担任システムによる指導を進んで行ったと考える教職員80%以上	A	・学年担任システムにより、協働での教材研究、交換授業、交換給食、共同での保護者対応などができたと回答した職員が93%にアップした。ほとんどの職員が効果を実感しているため今後も継続したい。	A	・学年担任システム(学年全体をその学年を担任した教員で全員で指導すること)で、協働意識が増している。先生方自身がこの効果を実感しているより取り組みたい。 ・先生方の得意分野を生かし、自分が担任していない学級の授業にも取り組んでほしい。	教頭 教務主任 学年主任

5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> 指導5部による主体的な教育活動の展開、タブレット端末を活用した研究・実践等により、若手教員の指導力向上や中堅教員の参画意識の育成に繋がり、協働体制の強化され学校全体の教育力が向上した。 年間の時間外勤務の職員平均は約360時間以内で、大半の職員が時間外勤務の解消に向けて取り組んだと回答している。若手職員は時間外勤務が多くなっているため、全職員で働き方改革の目的を共通理解し、更なる業務改善を進めていく必要がある。 来年度は学校運営協議会(コミュニティスクール)を設置することで、地域人材や外部講師等の力を借り、教育活動全体を活性化させ、児童に自らの夢や目標に向けて努力する意識を高めたい。
----------------	---